

外国人食堂で日本語の先生に

GOGO 高校大学

第一学院高校 大阪キャンパス
(大阪市浪速区)

外国人の就労支援や交流拠点を兼ねた「YOLO BASE」(大阪市、運営・YOLO JAPAN)で4月、外国人が無料で食事をとれる月に一度の外国人食堂が始まりました。第一学院高校の生徒たちは、日本語を教える先生役で参加しています。(中塚慧)

月に1回 異文化交流として

第一学院高校は、全国各地にキャンパスがある通信制の学校です。地域や社会の課題を解決しようとする「プロジェクト型学習」に力を入れています。

大阪キャンパスに在籍する6人が取り組んでいるのは「異文化交流プロジェクト」です。地域にあるYOLO BASEと協力し、外国人食堂に参加する外国人への日本語セミナーを担当することになりました。

4月27日、初めての外国人食堂にフランスやベトナム、韓国などさまざまな出身の35人ほどが集まりました。カッカレーとサラダ

教えることで自信につながる

日本語セミナーで教える内容は、生徒たちとYOLO JAPANの担当者が話し合って決めました。テーマにしたのは「スラング(俗語)とオノマトペ(擬音語・擬態語)」。田上暖さん(3年)はその狙いを「かたい日本語よりも、日常でよく使う日本語を教えたいと考えました」と話します。参加者はいくつかのテーマに分かれ、それぞれに生徒が一人ずつつきまじった。スラングの「やばい」「めっちゃ」は多くの外国人が知っている様子でした。一方で、「もしかしたらを意味する若者言葉「ワンチャン」は知らない人も多く、生徒たちは例文とともに使い方を解説。日本語を勉強中というクウェート出身の参加者が「ワンチャン、東京に行けるかも」と例文を披露すると、拍手が起りました。オノマトペでは「ドキドキ」「ギリギリ」

が無料でふるまわれたほか、外国人人材をさがす企業と話せる場、英語を話せる日本人看護師とのカウンセリングなどが設けられました。初回の費用はYOLO JAPANが負担しましたが、今後は協賛企業がお金を出し合い、月に1回の頻度で開きます。

プロジェクトに参加した理由は「いつか海外に行ってみたいから」という田上さん。インドネシアの方々と話しました。みなさん日本語が上手ですが「漢字が難しい」という声も。次は、自分からもっと話しかけて仲良くなり、知らない文化をお互いに紹介し合えたら」と言います。

米澤ひかりさん(2年)がプロジェクトに加わったのは、将来、英語を使う仕事をしたいためです。初めて海外旅行した中2の時、日本の空港で、流暢な英語で外国人に対応するグラウンドスタッフを見てから、憧れが強まりました。日本語セミナーを振り返り、「来てくれた人の出身国の特徴などを覚えたら、会話が広がりそう。間違ってもいいから、英語も使って話しかけてみたいと思います」。

副キャンパス長の松崎竜也さんは生徒たちに、「地域の外国人のために働きかけることで、自分自身のやりがいや自信につながる機会にしてほしい」と願っています。



参加した外国人に日本語を教える生徒(右)と、どれも4月27日、大阪市浪速区



会話をしみながら食事をとる人たち



「異文化交流プロジェクト」に参加する生徒たち